

新書紹介

「知」の探検学

川喜多二郎著

講談社現代新書 二〇二頁 三九〇円

近年、KJ法に対する認識が広く行きわたってきた。複雑化する社会、多様化する価値観の中で私達は常に選択し、決断することをせまられている。しかも、その結果は大多数の満足とコンセンサスを得られるものでなければならぬ。従来の多数決の原理は、一見民主的、合理的であるようであるが、少数意見の切捨てが生じ、大多数の満足どころか、コンセンサスすら得られない場合も起りかねない。雑多な事実、多様な意見を基礎として創造的選択、創造的決定がなされる必要がある。

手法がKJ法（川喜多二郎氏の頭文字で表わしたもの）でありその手法は既刊の『発想法』『統発想法』で詳細に説明され、多くの人々に読まれ実践されている。私もこの書を愛読し、またKJ法を手さぐりで試みている一人である。しかし、KJ法は簡単のようでむずかしい面もある。その大きな壁は、真実を語りかけるはずのデータが新鮮で良質のもでなければ、その結果はおのずと明らかである。データの良否を決定するのは取材方法の良否である。

本書でも「……KJ法の素材になる元ラベル（KJ法実施の際に活用するカード）のデータの質が悪いと、結果はどう救いようもないものになるわけだ。すなわち、取材ネットがうまく打てて、しかも個々の現場での観察と記録が新鮮で鋭いかどうか。これがKJ法の死活を決めてしまうのである。……」と指摘し、新たな隘路として問題提起している。

本書は、この隘路に挑戦し、明確に答えるべく、取材学として体系化して説明している。まず仕事の構造を「判断→決断→執行」に分解し、これを思考レベルと経験レベルとの間を移行する過程でとらえ、「W型図解」で示している。このW型図解の中の判断の部分で、問題提起という「思考レベル」から野外観察という「経験レベル」への過程を「探検」と呼び、現場でのデータ集めのための野外観察とともに、本書の中心となっている。

第一に探検の方法について、「探検の5原則」を提案し、頭の中の内部探検と調査等の外部探検を説明している。第二に現場に行つて取材する野外観察の重要な役割を示し、実施に際しての観察法及び記録法について具体的に述べている。また著者が開発した用具についても紹介している。ここで示される手法等はKJ法を離れても、日常生活でメモ、記録をするうえで活用できるものである。最後に、野外調査をするにあたっての心得について、フィールドワーク心得帳として実施の際の注意事項を含め、まとめている。

これらは、いずれも著者の貴重な体験（移動大学等）の結果によるもので、説得力がある。発想法、統発想法で展開されたKJ法が知的創造活動のハードウェアとすれば、本書で展開される取材学は、そのソフトウェアである。これらが一体となって、広義のKJ法システムを型作るものと考えらるべきであろう。

その意味で、本書は前記著者の延長線上に位置するものである。そこで、これから本書を手にする方々には、『発想法』『統発想法』（中公新書）の洗礼をまず受けることをお推めしたい。

また、本書は単なる知識の世界のものでなく、知的世界への探検を実践するための案内書である。それ故に、単に読破でなく、実験し実践しなければ意味がない。そのためにはKJ法に関心のある人が集まり、読書会又は研究会などの方法をとることが望ましい。

最後に本書の中で展開される世界は、既成概念、既成の行動パターンと異なる場合が多く、また著者独特の名前付けがされているので、若干のとまどいも生じるであろう。そのため、既成観念で読んで行くと、著者の心と異なる世界に迷い込んでしまうおそれがある。

既成観念の雲を取り除いた、すみきった秋空のなかで、素直に耳を傾けるならば、現在の複雑多様化した社会で生きるための多くの貴重なすべを語りかけてくれる書であると思う。

〈衛生局中保健所庶務課長 足立光生〉